稀代の戦後政治家　麻生太郎について

法学部政治学科二年 No.31761502 星野寛人

●はじめに

今回のレポート作成にあたって僕は麻生太郎を選んだ。麻生太郎のイメージは政治家としては世間の中での評価はそこまで高くないのかもしれない。というのも、首相時代の就任期間は短く、メディアに対しての受け答えもとてもぶっきらぼうであり、特に2018年に入っての主要な政治トピックであった森友問題の証人喚問では太田理財局長が出てくる問題への対応に追われて、連日のように対応に追われ、連日のように国会で陳謝、陳謝と深々と頭を下げているのとは対照的に、財務大臣であった麻生氏が頭を下げる気配は一向になく、見ている人には不遜で傲慢な印象が強かっただろう。しかし、彼の経歴を見てみると、日本の政治家には珍しく実業家の経験があり、まさかの元五輪選手という経歴があり、この事実からも彼のユニークな経歴が垣間見える。経歴とともに彼がどんな政治家なのかを紐解くとともに、彼の政治家としての役割や存在意義を記していきたいと思う。

●麻生太郎のキャリア：麻生内閣時代まで

麻生太郎は1940年9月20日、福岡県飯塚市の裕福な家庭に生まれた。学習院大学卒業後、アメリカやイギリスに海外留学をし、帰国後26歳の時に麻生産業に入社。33歳の時に麻生産業のグループ企業の麻生セメントの代表取締役になり、社長の傍で1976年にクレー射撃の日本代表としてモリオントールオリンピックに出るという、政治家になる前のキャリアとしてはとても異質である。そして、1979年10月、第35回衆議院議員総選挙に旧福岡2区（現：福岡8区）から出馬、4位（定員5名）で初当選し政界入りする。1996年には第2次橋本内閣の経済企画庁長官に就任し、初入閣。2008年の9月には08年自民党総裁選に4度目の立候補をし、351票を獲得。自民党総裁に就任する。9月24日、第92代内閣総理大臣に就任。麻生内閣を組閣する。また、麻生(2009)はこの時の所信表明演説の際に次のように述べている。

日本は、強くあらねばなりません。強い日本とは、難局に臨んで動じず、むしろこれを好機として、一層の飛躍を成し遂げる国であります。 日本は、明るくなければなりません。(中略) わたしども日本人とは、決して豊かでないにもかかわらず、実によく笑い、微笑む国民だったことを知っています。この性質は、今に脈々受け継がれているはずであります。蘇らせなくてはなりません。

この文章は演説の冒頭にあるものであるが、国民にとってこの演説はとても楽観的で期待が持てるようなものだった。当時麻生自身にも人気があり、麻生内閣にはとても期待が大きかった。また、麻生(2009, p36)は外交面での日本の役割について次のようにも述べている。

我が日本は今後、北東アジアから、中央アジア・コーカサス、トルコ、それから中・東欧にバルト諸国にまでぐるっと伸びる「自由と繁栄の弧」において、まさしく終わりのないマラソンを走り始めた民主主義各国の、伴走ランナーを勤めて参ります。

ここの文章でわかるのが、麻生自身の持つ楽観的なイメージである。麻生は祖父である吉田茂の姿を幼い頃から見ていて、日本が戦後に経済的にも政治的にも発展していった様子を知っていて、日本が現在の発展途上国の模範になるべきだという意見をこの一節では述べている。上記の文章が記載されている麻生自身の著書『自由と繁栄の弧』は彼が総理大臣だった頃に出版された著書であり、この本や諸演説を通じて麻生氏のリベラリズムな政治的観点ないしビジョンが国民に伝わり、国民は期待と抱いた。

しかし、この時リーマンショックで甚大な経済不況が起きてしまい、麻生内閣は緊急の景気対策に取り組み始めた。しかし、国民の満足度の主要なファクターでもある経済状況は一向に良くなる気配を見せず、上記のビジョンとは裏腹に閉塞感や苛立ちが高まってしまった。『言論NPO』が2009年（平成21年）1月6日に発表した「麻生政権100日評価アンケート」によれば、不支持率は就任からの半年間で32.6ポイント増の65.5%にまでになった。